

急を聞いて援軍が駆けつけ、戦闘は終わった。植民地主義者の傭兵どもは、仲間の死体を打ち捨てて、尻尾しつぽを巻いて逃げ去った。硝煙たち込める塹壕せんごうのあちこちから、子供たちの嘸り泣きが聞こえてくる。援軍の指揮者は、今も戦闘の恐怖に身動きできず、塹壕内にうずくまった子供たちを、塹壕外の一箇所に集めて、おだやかにゆくりと話しはじめた。涙が枯れ尽きるまで泣きはらそう。でも、涙で心を腐らせてはだめだよ。その指揮者自身、手で拭っても拭ってもとめどなく流れてくる涙で、顔をくしゃくしゃにしながら、自分に納得させるかのように話し続けた。指揮者は、いつしか戦闘のあった塹壕の方に顔を向け、誰かに語りかけるように話していた。その塹壕では、詩人とみんなから愛称で呼ばれていた、一人の兵士が、今さっきの戦闘で、非業ひごうの最期さいごを遂げていたのだった。詩人よ！

君は帝國主義本國から、世界革命國際旅団の一兵士として、われわれのもとにやってきた。はじめ、君たちの言う世界革命というものを、われわれは理解し得なかった。だがわれわれは、君のその真剣さに心うたれた。植民地主義者の傭兵どもに、家を焼かれ、家畜を殺され、田畑を荒らされ、両親兄弟を奪われて、ひもじさに泣く子供たちに、世界帝國主義の罪惡をわかりやすくあばき出し、解放闘争の道理を熱く説きかせ、したたかに生きる勇氣を与え、戦いの楽しさを教えた、君のその真剣さに。子供たちのなかで生活し、子供たちと苦樂をともにし、子供たちからこそまっさきに、植民地支配の悲惨さを、学びとろうとした君の、その真剣さに。われわれは深く心うたれた。君は誰よりもまっさきに、われわれの言葉を学びとった。君はみるみるうちに、われわれの言葉に熟達し、またたくまに子供たちと自由に話せるようになった。君はなんでも即興的に詩につくり上げ、それを子供たちに語り聞かせては、ともに大声上げてうたった。君のつくった歌の数々を、子供たちは決して忘れないだろう。植民地主義者の傭兵どもを、オチヨクリ笑い倒す歌。

奴らの殘虐行為に憤り、奴らへの憎しみをかきたてる歌。戦闘の勝利を心の底から祝う歌。戦闘の楽しさを真底称える歌。戦闘の貴重な教訓を、巧みに織り込んだ歌。同胞への尽きせぬ愛をうたった歌。そして戦士の死を悼み、復讐を誓う歌を。子供たちは君を、まことの兄のように慕った。両親を、兄弟姉妹を、奴らに奪われ、悲しみのうち沈んでいた子供たちも、明るさをとりもどし、未来の戦士となるべく、ともに助け合い、ともに励ましあう、生き生きとした生活をはじめた。そして今日も、君は子供たちと学びあっていた。そこへわれわれの警戒の間隙を突いて、植民地主義者の傭兵どもが侵入し、攻撃を仕掛けてきたのだ。君は子供たちと塹壕に立てこもり、自動小銃を撃ちまくって戦った。奴らは塹壕内に、手榴弾を二発同時に投げこんだ。君は投げこまれた手榴弾の一発に関して、手にとつて奴らに投げかえた。だがもう一発は、投げかえず時間的余裕がなかった。君はその手榴弾を腹にかかえて地に伏した。自らの身は粉々になろうとも、子供たちの命を守るために。君は自らの肉体を盾として、自らの命を犠牲にして、子供たちの命を守り切った。

君の自己犠牲は、多くの子供たちの命を守った。未来の戦士たちの命を守った。君が死すことで生きのびた、多数の子供たちは、君がつくり教えた歌を、決して忘れやしないだろう。君がつくり教えた歌を、うたい継いでいくことで、子供たちは君の志を継ぎ、必ずや植民地支配を打倒し、世界革命の戦士へと成長していくであろう。われわれは決して、君の自己犠牲的死を無駄にはしない。われわれは子供たちとともに、君の死を世界革命の「こやし」としよう。自分一人のためでもなく自分たち民族だけのためでもなく、世界帝国主義に虐げられている人類同胞すべてのために、命をかけて戦える、世界革命国際旅団の兵士に志願しよう。さあ、子供たち、みんなもう泣くまい。決して泣くまい。われらが愛すべき詩人の死を。

(同志の死に復讐を)

わが熱き血潮は大地に流れた

だが同志よ

わが死体に白き屍衣を着せるな

わが死体を革命の旗で包め

わが心臓はとまった

だが同志よ

わが死体を墓に埋めるな

わが死体を突撃の盾とせよ

わが呼吸はとまった

だが同志よ

鎮魂曲はうたうな

復讐の雄叫びをこそ歌とせよ

さあ同志よ

わが死を乗り越えつき進め

わが銃を捨てあげ

連続する銃火で復讐果たせ

「弱者」

おれたちは「弱者」なのだろうか
目に見える武器を奪われ

肌ふれあうスクラムを組めず

友とみつめあって

肉声で語りあえないおれたちは

「弱者」なのだろうか

つき倒されても

ひとりでは起ち上がれない

おれたちはいつまでも鎖につながれた

「弱者」だと言うのだろうか

ドブネズミ

どしゃぶり ずぶぬれ ぬれネズミ

かみなり いなずま 傷だらけ

どろんこ ぬかるみ どんだらけ

踏まれて 蹴られて ドブのなか

ドブにぶかぶか冷たいムクロ

どうせ野垂れ死ぬ運命ならば

野垂れ死にを強いる大黒柱を

かみつき かみきり かみくだけ

命尽き果てるその日まで

子モグラ モグラ

迷い子泣き虫

子モグラ モグラ モグラモチ

かーちゃんモグラいないとて

とーちゃんモグラいないとて

泣いても道はひらけない

さあ掘れ 土の子

子モグラ モグラ モグラモチ

掘ればからだがあたたまる

掘ればメメズが食べられる

掘れば仲間とめぐりあえる

さあ掘れ 土の子

子モグラ モグラ モグラモチ

今日を掘れば明日がくる

冬を掘れば春がくる

土台を掘れば柱は倒れる

さあ掘れ 土の子

子モグラ モグラ モグラモチ

悲惨と不幸の柱を倒せ

暴虐と絶望の柱を倒せ

暗黒と飢餓の柱を倒せ

撃つ

失語症にとり憑かれた俺は
銃口に俺の心を語らせた
俺は撃つ
俺は心の引金を引く
敵の肉体の奥深く喰い込む弾丸が
俺の傷ついた実存内奥の叫びを
閉ざされた世界の内壁に刻印する
絶えることなく弾丸よ 撃ち出でよ！
銃舌にも心の銃口から撃って出よ！
銃口は世界に開かれた唯一つの窓だ
弾丸はできたての熱い詩句だ

撃ちやがれ

力尽きて倒れ死ぬまで撃ちまくれ
虚空を火花散らす詩句で満たすため

こぶし

鋼鉄の殻に封じ込められた俺たちは
握る拳こぶしに呪文を念じて
烈しく強く打ちつけた
常識という名の殻をぶち破るため
安定という名の殻をぶち破るため
秩序という名の殻をぶち破るため
打ち続ける俺たちの拳の皮膚が
たとえ破けようとも
打ち続ける俺たちの拳の血管が
たとえ血を吐こうとも
打ち続ける俺たちの拳の骨が
たとえ剥き出しになろうとも

打ち続ける俺たちの拳が
たとえ砕け散ろうとも

かっくらえ

俺は澄んだ心で銃を構える
俺は心静かに狙いを定める
俺はゆっくりと引金を引く
撃鉄が起きる

発火薬が点火する
弾丸は銃口をあとにする

銃弾は敵の心臓にぶち当たる
波動が熱い詩句となって

俺の体内を快くも駆け巡る
かっくらえ

赤熱・怨念おんねの実弾を
ぶっちやぎれ

腐乱・不実の心臓を
でんぐりかえれ
脂ぎったどてっ腹よ

奄美のハブ

奄美のハブはしたたかに
弾圧喰って武装する
奄美のハブはしなやかに
幾多の罨を喰い破る
ハブの毒は猛烈に
奴らの玉を奪い取る
とぐろを巻いて
鎌首あげて
歌え歌え
ヤマトを呪うハブの血歌を
踊れ踊れ
ヤマトを滅ぼすハブの血舞いを

囚人夢想曲 I

香ばしく髪白う少女が
溶けゆく朝の光のなかで
心ときめかす惑いの歌うたっていた
少女は魔法によって姿かえられた小鳥のように
私の眼窠の片隅のくほみに宿った
朝の光のなかに沐浴する小鳥は
私をあやしく誘った
足音もなく近づく私の両手は
少女のふくらみかけた胸にまわり
少女は小鳥となって大空に消えた
私の手に
ぬくもりのひとかけらも残さず

脳裡に浮かんで消えた泡のごとき
夢が溶けたひと雫

囚人夢想曲 Ⅱ

夢が語る夢物語り

世迷い事は心ときめく美しさ

あり得べからざるものは

美しすぎて心張り裂け

蛇じやになれ

崇たかって蛇じやになれ

憑かれて踊って蛇神じやしんたれ

しなやかに円まどかな苦惱の子官が

喜びあふれる詩種うたねを身に宿す

そのように

にぎりつぶされた欲望の泉が

夢の子官に蛇を孕む

蛇になれ

崇って蛇になれ

憑かれて踊って蛇神たれ

八目ひとめに肌はあやしげで

心は無心の心で満たされて

動きは鬼神きしんの羽撃はげきで

瞳は呪文の涙で泣きぬれ

夢で夢見た蛇神たれ

地から涌わき出る泉のように

口から這はい出す呪文のように

眠りの深い底無し沼から

腰をくねらせ浮き上がり

夢の裂け目に身を入れて

夢と現うつの国境こえて

脱獄の花を夢精で咲かす

花の寿命が蛇の持ち時間

泣いて生まれて笑って死ぬまで

ひとつ想いはあの娘こに逢って

肌と肌をあわせて燃えて

とけ入るように滅び去る

ジャスミンかお薫る

蛇の道 蛇の目

蛇になれ

崇って蛇になれ

憑かれて踊って蛇神たれ

自白

あの忌わしい日々を
忘れるな

あの裏切りの日々を

決して忘れるな

極刑などこわくないという

いきがり

もはや武器をもって戦えないという

敗北主義

戦いは終わったという

ひとりよがりの諦め^{あきらめ}

戦いはすぐには引き継がれないという

思い上がった不信

語ることがデマに抗し得るといふ

甘い幻想

なぜ

叩かれてもすかさずされても

黙して語らぬ

石地蔵になれなかったのか

その言葉は

敵を喜ばせたのだ

その言葉は

オノレを墮落させたのだ

それは敵への憎悪の不在の証^{あかし}だった

それは敵への戦意の不在の証だった

その言葉は

もはや言葉では取りかえせない

呼吸 I

どこからともなく飛んできた
獄窓の鉄格子をとりまき木に

心楽しく囁く小鳥よ

私の心は踊っている

君の囁りの言葉が

私には苦もなくわかるから

君の囁りの心根が

私の踊る心根と

しっくり共鳴し合うから

どこからともなく飛んできて

獄窓の鉄格子の上を飛びまわり

心優しく囁く小鳥よ

独房深く閉じこめられて

呼吸に苦しむ私の胸を

自然の息吹を窓する胸を

限りなく和ませてくれ

どこからともなく飛んできて

獄窓の鉄格子を舞台に踊る

心憎い小鳥よ

その囁りの靈力で

私の病んだ悲しい呼吸を

自然が胸のうちに包みこむ

遠きいにしえの原郷へ

強くさわやかに誘ってくれ

呼吸 Ⅱ

六月は恐怖の隠花植物だ
春の傷口から吹き出した青酸の結晶体だ
絶望と情欲に引き裂かれた肉の塊が
夜な夜なかほそい悲鳴をあげる
その肉塊の大きく口を開いた裂け目から
肝きもを石臼ですりつぶしたような
膿汁がにじみ出たり
絞めつけられた海綿体が
血だらけの泡を吹いて
こと切れるときのように
烈しく痙攣けいれんするのだ

ほのぼのとした春のほほえみも
ひるがえれば残虐極まる拷問だ
いのち萌ゆる新緑も
裏返せば自滅への誘いだ
やすらぎに満ちた夜の甘い抱擁も
ここではささくれだった針のむしろだ
さかしまに心臓蹴り上げる
ゴム風船のごとき悪因よ
夜の長さはおまえの執念の長さなのだ
だが 忘れるなよ
いつかおまえをひねりつぶす
レクイエムが
おまえの執念を葬り去ることを

呼吸 Ⅲ

愛しい呼吸よ／

苦しみ悶えるフルートよ／

かつては心にしみいる詩をかなでていた

あのしなやかな日々を

力のかぎり取りもどせ／

獄中で磨かれた武器

井之川巨

言霊Ⅱことだま。「言葉に宿っている不思議な靈感。古代、その力がはたらいて言葉通りの事象がもたらされると信じられた」(広辞苑)。「ことだま」の題名は、ことばに託す願いがこもって、いかにも黒川芳正らしい。

東アジア反日武装戦線兵士黒川芳正は、獄中にとらえられることによって、日本天皇や帝国主義者、侵略企業にむけて装填した爆弾を、詩にかえた。いどは自らの存在そのものを炸裂する爆薬に代置しようとするかに見えたが、いま、その炸裂する身も心もすべて言葉にわりかわり、逡巡する人びとの心の口火に点火しようとしているかのようなのである。無期刑という極限のたたかいの中で、なお少年のように研ぎ澄まされた詩的感性は、激しく、執拗に、それだけで奇妙に冴えかえった世界を現出する。

正直いって深くには、黒川らの「反日」の思想にただちに納得しかねるものが、いまもある。しかし、被抑圧民族の側から日本帝国主義を撃つ、そのたたかいに呼応する日本人民の主体を帝国主義の内側から構築していかうとする思想としてなら理解できるし、その思想とたたかいはまさしくほくらのものだ。その情熱は真正であり、正義のたたかいといってよい。

原詩人から黒川へ信号を発し、黒川から信号をえてからはほ二一年の月日がた

つ。骨と筋からできた初めの頃の詩にくらべ、最近の黒川の詩には肉や血のぬくみ加わり、詩がはるかに豊かになったように思う。

「目に見える武器を奪われ／肌ふれあうスクラムを組めず／友とみつめあって／肉声で語りあえないおれたちは／『弱者』なのだらうか」(「弱者」)、「なぜ／叩かれてもすかさずされても／黙して語らぬ／石地蔵になれなかったのか」(「目白」)、「さかしまに心臓蹴り上げる／ゴム風船のごとき悪因よ／夜の長さはおまえの執念の長さだ」(「呼吸Ⅱ」)。—このようなフレーズは、初期の黒川の詩にはまったく見られぬものだった。「強さ」を前方へ押し出すことによつてのみ詩を成り立たせるのではなく、自らの「弱さ」をも詩的モチーフとし、それを直視していかうとする詩は痛ましく、好感がもてる。黒川芳正の成長と自信のほどがうかがわれるのである。

詩集『言霊』の原稿を何回か読みかえして思うことは、黒川芳正が抒情詩も叙事詩も書ける詩人だということである。今後についていえば、とくに叙事詩に期待したい。「帰ってきたジャッカル」「詩人の死」などにその萌芽が見られるように、黒川芳正にはストーリーテラーとしてのすぐれた資質があることも疑いない。革命の時代の英雄伝説を詩によって創造していく作業は、「革命の詩」「詩の革命」をめざすほくらにとつての大きな課題の一つだと思うのである。

一九八〇年十一月三〇日

あとがき — 言霊の復権に向けて

「言葉というものには力があり、またその言葉自体も力を持つ。言葉は何もないところから生まれてきて、音と意味を作る。また、あらゆる事物に起源をあたえる。言葉によって人間はこの世と対等にやりとりができるのだ。そして言葉は神聖なものである。人の名前はその人だけのものであり、それを自分のものにしておこうが乗てようが持ち主の意のままだ。近年までのカイオワ・インディアンは死者の名を口にしようとはしなかった。そうすることは無礼でもあり不正にもなるからである。死者は自分の名前をたずさえてこの世を去るのだ。」(N・S・ママディ著『レイニ・マウンテンへの道』晶文社)。

ここには、北米大陸原住民Ⅱ赤人(「インディアン」)の言霊思想の一端が示されている。言霊思想は、決して、日本民族固有の、独自の、特殊な思想ではない。アイヌ語の「言葉」を意味する「イタク」の原意は、「魂を呼びよせる」という意味である。東北農民の「巫女」という言葉は、アイヌ語の「イタク」に源を発するという説もある。言霊思想 — それは、自然と人間とが一体として共生する、本源的共同体にこそ固有の世界観であり、原始共同体的自然人のイキザマである。

異族征服と原始共同体の破壊によって、国家が形成されるとともに、自然と

人間との一体的共生構造も破壊され、言霊自体も人世からは追放された。国家に包摂された人々にとって、言霊とはせいぜい、文学上の飾りものにしかならないものとなる。そこに表現されているのは、本源的な意味での言霊ではなく、追放された言霊の、形骸化した記憶であり、言霊の死体描写でしかない。『記紀』や『万葉集』に出てくる「言霊」とは、そのようなものである。

近世・徳川幕藩体制下において、中国文化との対抗意識から、日本民族の神国的優越性を誇示するために、本居宣長や平田篤胤らによって、『記紀』や『万葉集』に依拠した言霊思想の復権が叫ばれた。

だが、彼らが依拠した「言霊」とは、もとより「言霊の死体」であり、彼らが行なったことは、「言霊の死体解剖図」の作成でしかなかった。そして、この「言霊の死体解剖図」をもって、彼らは、「言霊は日本民族に固有のものである」という民族主義的言霊観をデッチ上げたのである。この民族主義的言霊観は、天皇主義的国粹思想のイデオロギーとして、「明治維新」のイデオロギー的源動力となり、「昭和ファシズム」のイデオロギー的源動力へとひきつがれていく。

現代世界は、言うまでもなく、自然と人間との一体的共生構造の破壊の上になり立っている。そこから派生する言語状況は、死語的状况である。この死語的状况は、一方では、言葉化し得ないものは実在し得えないという言葉万能主義として、他方では、言葉は仮象にすぎないという言語ニヒリズムとして、立ちあらわれている。この対立し合い、また補い合う、言語万能主義と言語ニヒ

リズムの狭間で、人は、言葉への安易なもたれかかりと、言葉不信という自己矛盾にひきさかれる。

言葉の在りようと、その言葉が発される世界の基底構造は、分ちがたく結びついている。それゆえ、言葉に魂を甦らせ、原始共同体の世界観・イキザマとしての言葉を復権するためには、現存世界の基底構造そのものを根源から革命しなければならぬ。

詩集『言霊』で、私がささやかながら試みようとしたことは、第一に、民族主義的言霊観に対する批判であり、第二に、現代世界の死語的状况の抉り出しと、それへの批判であり、第三に、死語的状况をもたらす現代世界の基底構造を根源から変革する世界革命へ向けての詩的アジェンションである。

ここで、最後に、私の個人的な「原詩人」観を述べておきたい。原始共同体的言霊観の基本原理は、「言・行」の融即一致である。そして、「言」と「行」との分離不一致こそ現代世界の根本特徴である。「原詩人」とは、この現代世界の根本特徴たる「言」と「行」の分離不一致を克服し、言葉に魂を吹き込むものである。そうすることで、言葉を復権しようとするものである。それは、人類の本源の共同体のよみがえる世界革命をめざす、「武装せる詩人」であり、「詩魂に燃えた戦士」である。

なお、本詩集『言霊』とともに、『フレムシ第一詩集——生まれ出でよ、反日戦士』（東京都下谷郵便局私書箱99号、KQ通信社取扱い、五百円）をぜひ参照されるよう希望する。

一九八〇年一〇月二八日 黒川芳正

著者略歴

一九四八年生まれ。六八―七〇年、ノンセクトとして全共闘運動を担う。後、全共闘運動の思想的実践の根源化をめざして下放。日雇労働を行ないつつ、山谷などの寄せ場で活動。寄せ場での体験を踏まえて東アジア反日武装戦線に志願。七五年逮捕され、一時自白屈服するが、後自己批判し、現在、東拘において喘息を抱えながら、獄中闘争続行。東アジア反日武装戦線KF部隊（準）構成員。

現住所 東京都葛飾区小菅一―三
五―一 東京拘置所内

原詩人叢書 8

黒川芳正詩集「言霊」

定価五〇〇円（〒二〇〇円）

一九八一年一月一〇日発行

著者／黒川芳正

発行所／原詩人叢書刊行委員会

東京都品川区大崎四―二―一三―四〇五

電話〇三―四九二―三三九四

装丁／山崎晨

原詩人叢書

服部清一詩集	黒い門	五〇〇円
長島光三郎詩集	三角まなこ	六〇〇円
井之川巨詩集	アカマタ・クロマタ	五〇〇円
植松安太郎詩集	詩を愛するわかものへ	五〇〇円
くりはらすなを詩集	午後	三〇〇円
川口五郎詩集	ジョーの獄中詩	五〇〇円
宮本礼子詩集	見えるものと見えないもの	五〇〇円
黒川芳正詩集	言霊	五〇〇円

原詩人叢書刊行委員会

東京都品川区大崎四―二―一四―四〇五